

東日本大震災から10年、今は新型コロナウイルスに翻弄されるなか、誰もすこやかな暮らしを願う気持ちがより強まっていることでしょう。大きな災いから逃れることだけでなく、小さな幸せの成就にいたるまで、人々は今も昔も身近なものに願いを託してきました。その一端をミュージアムで見つけませんか？



疫病退散できるかも？ 摩訶不思議な医学書

染色家・芹沢銈介のコレクションに、解説したくなるような不思議な本があります。インドネシア・スマトラ島のバタク民族に伝わる医学書「ブスタハ」と呼ばれるものです。これは、19世紀初頭、呪術師が保有していたものらしく、占いや病気治療などの秘策が書き留められているのだとか。素材は、なんと木の皮をなめして作られ、折本仕立てになっています。バタク文字とともに、動物や虫、人と思われる絵がユニークです。この医学書で、現代も疫病退散できたらいいのに！



折本は厚みが8cm、広げると2m以上もある



トバ・バタク民族(スマトラ島)が用いていたバタク文字

こちらも
どうぞ

芹沢銈介美術工芸館公式ウェブサイトの「Web展示室」では、「芹沢銈介があつめた仮面—MASK—」や「東北藍めぐり—染織とやきもの—」といったテーマで所蔵品を観ることができます。



東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館 仙台市青葉区国見1-8-1 ☎022-717-3318 当面の間、臨時休館

文学館で ぼのぼの神社発見！

文学館には、哲学とギャグが融合した漫画『ぼのぼの』(竹書房)で知られる在仙の漫画家、いがらしみきおさんのオフィスに飾られていた「ぼのぼの神社」があります。「手先が器用だった2代目のアシスタントがヒマそうだったので作らせた神社」(いがらしさん談)なのだとか。手を合わせて、ラッコのキャラクターぼのぼのに心の内をこっそり明かしてみは？



常設展示室にあるぼのぼの神社

体から虫を逃すな！ 東北の民話ホラー

いがらしみきおさんは、「庚申信仰(こうしんしんこう)」を題材にした漫画『こうずんさん』(あきは詩書工房/2019年)も描いています。60日に一度巡ってくる庚申(かのえさる)の日に、いつも人の体内で悪事を監視している三尸(さんし)の虫が、体外に出て、天帝に宿主の悪行を告げに行き、宿主の寿命を縮めると言い伝えられており、それを防ぐために徹夜で酒宴をひらくというもの。少しずつ変化しながらも同じ話が繰り返され、読み進めるうちに深い闇に迷いこんだような気分になります。



いがらしみきおコーナーに展示されている『こうずんさん』。漫画家生活40周年記念の限定本として出版されました

こちらも
どうぞ

『こうずんさん』は、せんだいメディアテークで2015年に開催された展覧会「物語りのかたち—現在に映し出す、あつたこと」にて民話をテーマとしたインスタレーションのために書き下ろされた作品です。展示記録をメディアテークの公式YouTubeで見ることができます。



仙台文学館 仙台市青葉区北根2-7-1 ☎022-271-3020 9:00-17:00(展示室入室は16:30まで) 休月曜(休日は開館)、休日の翌日(休日は開館)、1月-11月の第4木曜(休日は開館) 一般460円、高校生230円、小・中学生110円

迫力ある姿で 人々を守る鬼神

仙台地方では昔から、ヤマセによる冷害で起きる飢饉をはじめ、地震や洪水、火災、疫病などの天災にたびたび悩まされてきました。仙台市博物館では、江戸時代中期に仙台藩の絵画制作も担った狩野派の幕府御用絵師が描いた鍾馗図(しょうぎず)を見ることができます。鍾馗は唐の玄宗皇帝の夢に現れて病魔をはらったという伝説があり、疫病をはらう鬼神とされています。邪気をはらうにふさわしい、眼を見開いた迫力ある姿が印象的です。



鍾馗図 狩野典信 筆/仙台市博物館所蔵/3月21日(日)まで展示中

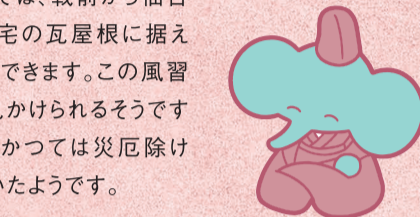


屋根の上の鍾馗像 仙台市歴史民俗資料館所蔵

また、仙台市歴史民俗資料館では、戦前から仙台市青葉区広瀬町の店舗兼住宅の瓦屋根に据えられていた鍾馗像を見ることができます。この風習は京都など関西地方ではよく見かけられるようですが、東北地方では珍しいもの。かつては災厄除けの願いが家の作りにも現れていたようです。

波乗りウサギの瓦

屋根の上には凛々しい姿の像だけではなく、こんなにかわいらしい意匠の瓦も。波に乗るウサギの意匠は江戸時代から全国的に広く知られ、水に係るものを置いて火除けのまじないとされていました。水面にキラキラと映る月明かりを波間にウサギが跳ねる姿に見立てて作られたもののようで、月にはウサギが住むという仏教説話が根底にあるようです。



波乗りウサギの瓦 仙台市歴史民俗資料館所蔵

仙台市博物館

仙台市青葉区川内26 ☎022-225-3074 9:00-16:45(入館は16:15まで) 休月曜(休日は開館)、休日の翌日(休日は開館) 一般・大学生460円、高校生230円、小・中学生110円 ※2月13日の地震被害による施設設備の復旧のため当面は臨時休館(2月26日時点)

仙台市歴史民俗資料館

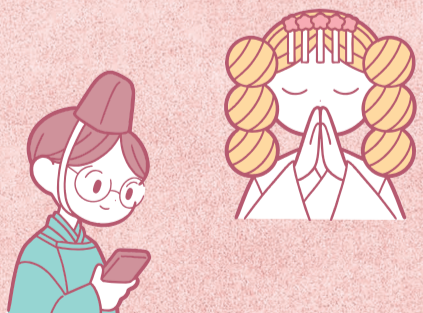
仙台市宮城野区五輪1-3-7 ☎022-295-3956 9:00-16:45(入館は16:15まで) 休月曜(休日は開館)、休日の翌日(休日は開館)、第4木曜日 一般・大学生240円、高校生180円、小・中学生120円 「展覧会」特別展「仙台の災害—天災は忘れたころに—」4月11日(日)まで

井戸を埋める時の おまじない

震災から10年、仙台市の沿岸部の荒浜では、住宅の外壁や基礎が取り払われ、井戸だけがぼつりと姿をあらわにして、そこで生活が営まれていたことを物語っています。井戸を閉じる時には「梅」の木の枝と「葦(よし)」を井戸の中に落とし、「埋めてよし」とする風習があったといいます。せんだい3.11メモリアル交流館では、仙台市東部や貞山運河沿いを中心に30年に渡って街並みや風景を写真で記録し続けてきた、写真家で建築家の高橋親夫さんの写真や資料を手にとることができます。「梅で葦」を語った祖母は蒲生生まれで、そちらの文化かもしれません。もちろん普段から井戸を不浄に扱うことは罰が当たると言われていましたし、井戸の中にもものを投げ入れることなどんでもないことでした。正月は井戸の神様にお幣束を立て餅やご飯をあげ、冷蔵庫のない時代は井戸の中でスイカやキュウリを冷やしていました。(高橋さん談)



高橋さんが撮影した荒浜に残った井戸。跡地利活用事業のための工事で更地化が進んでいる今、この姿が見られるのもあと少しかもしれません



こちらも
どうぞ

せんだいメディアテークの「3がつ11にちをわすれないためセンター」のウェブサイトで、高橋さんが記録した荒浜の生活の跡が紹介されています。



せんだい3.11メモリアル交流館で販売中の「海辺のメモリアルソーダ」に付属の冊子「海辺のメモリアル帖 #5」に高橋さんの活動や想いが描かれています。



せんだい3.11メモリアル交流館 仙台市若林区荒井字常形85-4 ☎022-390-9022 10:00-17:00 休月曜(休日は開館)、祝日の翌日(休日は開館) 見学無料

SMMA クロスイベント「特集 東日本大震災10年—仙台の災害とミュージアム」 2月11日(木)~4月11日(日) 仙台市博物館 仙台市歴史民俗資料館 せんだい3.11メモリアル交流館 各館にて開催

東日本大震災から10年となることをうけて、震災後の各館のこれまでの取り組みや、現在開催している災害に関する展示を紹介します。